

氏名（本籍）	堀田 亮 （北海道）
学位の種類	博士（心理学）
学位記番号	博甲第 7067 号
学位授与年月	平成 26 年 3 月 25 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当
審査研究科	人間総合科学研究科
学位論文題目	重大なネガティブ体験の意味づけに関する心理学的研究
主査	筑波大学准教授 博士（人間科学） 青木佐奈枝
副査	筑波大学准教授 博士（文学） 岡本智周
副査	筑波大学准教授 教育学修士 杉江 征
副査	筑波大学教授 教育学博士 櫻井茂男

論文の内容の要旨

（目的）

本論文は、重大なネガティブ体験に遭遇した時に、その出来事をどのように考え、受け止め、理解し、乗り越え、人生の中に位置づけていくのかを、意味づけ(meaning making)という概念を用いて心理学的に解明することを目指すものである。近年では、意味づけた後の個人の変容を表す“生成された意味(meaning made)”と適応・精神的健康の関連について一貫しない研究結果の提出により、“意味づけの過程(meaning making process)”が注目されるようになっている。そこで意味づけの過程が持つ特徴や機能の解明が求められている。

本論文では、意味づけの過程に影響を与える要因や、意味づけの過程が持つ特徴や機能について実証的に検討し、重大なネガティブ体験を経験した個人が経る意味づけの過程や、その過程を通じた個人の変容を明らかにすることを目的とする。意味づけの過程に関しては、同化と調節という観点から検討を行う。同化は“自身が持つ物事の見方や考え方に一致するように自然とその体験を解釈、理解できること”と、調節は“その体験を理解、解釈するために意識的、意図的な認知、感情的処理を行い、自身が持つ物事の見方や考え方を修正していくこと”と定義される。本論文の目的を達成するために、以下の 3 点について、実証的に検討する。

1 点目は同化と調節に関する測度の開発である。これまで同化と調節は、理論的検討に留まる研究が多く、実証的検討を可能にする尺度は開発されてこなかったため、信頼性・妥当性を備えた尺度の作成を目指す。2 点目は同化と調節に影響を与える個人特性・状況要因の検討である。重大なネガティブ体験を経験した時に、個人が同化と調節のどちらの対処を取るかは個人特性の影響や、

体験の状況要因の影響を受けることが想定されるため、その影響因を明らかにし、意味づけという現象をより多面的かつ包括的に捉えることを目指す。3点目は同化と調節が持つ特徴や機能の検討である。重大なネガティブ体験を経験した人への援助や臨床的介入を行う際の有意義な示唆を得るために、同化と調節が重大なネガティブ体験後の個人の変容に与える影響を明らかにし、意味づけの過程が持つ特徴や機能の解明を目指す。

(対象と方法)

対象は青年期の大学生であった。合計 2167 名が調査に協力し、2010 年 8 月から 2013 年 4 月にかけて 1 回の面接調査と 9 回の無記名・個別自記式質問紙調査を行った。調査の実施にあたっては大学内の倫理委員会の承認を受けた。

(結果)

研究 1 で、意味づけの対象となる重大なネガティブ体験にはどのようなものがあるか、探索的検討を行った。また重大なネガティブ体験と関連が強い感情について検討した。研究 2, 3 では、信頼性、妥当性を備えた“意味づけにおける同化・調節尺度”を作成した。次に同化と調節に影響を与える個人特性について検討した。研究 4 では楽観性との関連を検討し、楽観性のタイプによって意味づけの過程への影響は異なることを明らかにした。研究 5 では、自己開示動機との関連を検討し、“被受容感”と“助言”という動機づけの内容に関わらず、自己開示を行うと調節が促されることを明らかにした。加えて過敏型と誇大型という 2 種類の自己愛との関連も検討し、誇大型自己愛の傾向が高いと、同化を通した意味づけを用いやすいことを明らかにした。さらに同化と調節に影響を与える状況要因について検討した。研究 6 では、体験の質的側面に着目して検討を行った。その結果、その後の人生への影響度の大きさや心的外傷性ストレス症状の強さといった体験の重大さを規定する要因に関しては、調節に影響を与えることを明らかにした。統制不可能感に関しては、同化、調節どちらも促進されるが、特に同化への影響が大きいことを明らかにした。研究 7 では、感情的側面に着目して検討を行った。その結果、ポジティブ感情を感じるほど同化を通した意味づけを、ネガティブ感情を感じるほど調節を通した意味づけを行うことを明らかにした。無気力感に関しては、疲労感を感じるほど調節を通した意味づけを行い、自己不明瞭感を感じるほど同化を通した意味づけを行わなくなることを明らかにした。研究 8 では、ソーシャル・サポートに着目して検討を行った。その結果、多くのサポートを受けるほど、調節を通した意味づけを行うことを明らかにした。またサポートに対して満足感を感じることは、同化・調節どちらの意味づけも促進されることを明らかにし、心理的負債感を感じることは、調節を通した意味づけの促進に繋がることを明らかにした。最後に同化と調節が自己概念の変容に与える影響について検討した。研究 9 では、PTG は同化よりも調節を通した意味づけの方が強く感じられることを明らかにし、自我同一性の変容に関しては、調節のみが促進することを明らかにした。研究 10 では、ポジティブ・ネガティブ両側面の変容との関連を検討した。その結果、自己概念、自己感情ともに、同化を通した意味づけでは、ポジティブな変容は起こりにくいものの、ネガティブな変容を抑制することを明らかにした。一方で調節を通した意味づけでは、ポジティブな変容を導くものの、同時にネガティブな変容にも正の影響を与えてしまうことを明らかにした。

(考察)

本研究では、意味づけにおける同化・調節尺度を作成したことによって、同化と調節の観点から

実証的な検討が可能となった。しかし本尺度は、信頼性は十分であったが、妥当性に関しては今後検討の余地があると考えられる。また同化や調節の行われやすさは、個人差や体験が生じた文脈によって異なることが明らかとなった。今後は個人特性と状況要因の相互作用による影響も検討する必要があると言える。加えて、自己概念の変容との関連から、同同化を通じた意味づけは自己のポジティブな変容の契機とはなりにくいものの、自己のネガティブな側面に直面することは避けられると考え、調節を通じた意味づけは成長感を始めとするポジティブな変容の機会となるものの、体験と向きあう中で、自己や周囲の世界に対するネガティブな側面も知覚し、助長されるものと考えた。

本論文は、これまで実証的な知見が少なかった意味づけの過程に着目した点において、新たな視座を提供するものであり、意義は大きい。加えて意味づけという概念は、重大なネガティブ体験からの適応過程を説明する上での重要かつ有意義な示唆を提供しうるものであるため、本論文で示された知見が、今後の意味づけ研究の発展の一助となることが望まれる。

最後に、本研究の課題と今後の展望として、回顧法かつ横断的研究であること、意味づけのモデルの部分的検討に留まっていること、という2点があると考えられる。

審査の結果の要旨

(批評)

本研究は、人が重大なネガティブ体験に遭遇した時に、その出来事をどのように考え、受け止め、理解し、乗り越え、人生の中に位置づけていくのか、つまり“意味づけ”ていくのかを心理学的に実証的に検討したものである。本研究の独創的な点は、“生成された意味”と精神的健康や適応との関連という先行研究で中心とされてきた視点とは異なり、同化と調節という“意味づけの過程”に着目した点である。本研究では、それらの概念を実証的にとらえるための尺度を作成し、同化と調節に影響を与える個人特性や状況要因を検討し、さらに自己概念の変容に与える影響についても明らかにした。意味づけという概念は、重大なネガティブ体験からの適応過程を説明する上での重要かつ有意義な示唆を提供しうるものであり、本研究の成果は今後のこの領域の研究に大きく貢献するものであり、高く評価できる。

以上、研究の意義、独創性、成果、論文のまとめ方など、博士論文としての水準に達していると判断される。

平成 26 年 1 月 21 日、学位論文審査委員会において、審査委員全員出席のもと論文について説明を求め、関連事項について質疑応答を行い、最終試験を行った。その結果、審査委員全員が合格と判定した。

よって、著者は博士（心理学）の学位を受けるのに十分な資格を有するものと認める。